

# 山形県立 博物館 ニュース 第113号

1992. 11



紀宮様ご来館 特別展「やまがたと最上川」(1992. 10. 6)

## 21世紀をめざす博物館について

副館長 奥山 武夫

今秋、徳島市で開催された第40回全国博物館大会の大会テーマは「新しい世紀をめざす博物館」— 期待される博物館像 — でした。21世紀にふさわしい博物館建設をめざさなければいけない本館としては大変興味のあるテーマでした。

シンポジウム、フォーラムでは講師の先生方のたくさんのお話を聞くことができましたが、その一部には次のようなことがありました。

今、日本の社会の流れのなかで進んでいる「行政の文化化」「文化の時代」という波に対して文化の宝庫であり、情報の基地である博物館がはたさなければいけない役割は大きく、博物館がもっている文化価値をいかに展示するか、利用していくかという創造の場でもなければいけないなどです。

博物館を見に来た人々に、それぞれ十分な教育機能が発揮できるような展示をして、入館者の増大を図らなければいけないこと、展示だけでなく体験学習などの社会のニーズに対応する活動が必要であること、また、友の会を通じた教育活動や

博物館のボランティア活動など大切なことが話されました。

博物館に幼児をつれた親子や身障者が訪れた場合、どこの博物館でも対応できるのか。なども主張されました。

そのなかで、今回は大きく取り上げられた話題ではなかったのですが、私は好まれる博物館の環境のことと、体験学習型博物館の必要性のことが一番興味深く感じられました。

博物館や文化センターなどが都市の顔になったり、都市の風景、魅力の一つにもなるほか、人々に好まれる環境や複合施設を備えた博物館作りがますます必要になってくると思われました。

体験型博物館では展示を単に見るだけではなく、自分で探し出すというコーナーや伝統的な生活、文化を体験できる場をつくるなど、博物館活動に市民が参加しながら発展していく博物館が必要になってくるでしょう。

**特別展**

**やまがたと最上川 — 上方文化との交流 —**

会期：平成4年9月29日(火)～11月8日(日)

本特別展は、べにばな国体を記念する「スポーツ芸術」の一環として、9月28日（一般公開は29日から）より11月8日まで本館第三展示室で行なわれました。

べにばな国体を芸術文化の側面から支援する主旨のもと、県外から多数訪れる国体関係者や観光客に山形の歴史と文化を広く紹介するための特別展をめざし、昨年度から民俗部門を中心に総力をあげて取り組んできました。そのため、本特別展は経費、展示内容ともに本年度本館行事の最大の目玉とされました。

展示の概要は次のとおりです。

- 1 物資を運んだ道 — 最上川水運の発達、西廻り航路の発達
- 2 文化を運んだ道 — 仏像文化、キリスト教文化、陶磁器の流入、庄内の服飾文化、山形商人の花風呂敷、貝合わせと大津絵、紅花の染色文化、雅楽の調べ、雛の文化、香道の世界、祇園祭りの伝承
- 3 あおぞ 青苧文化をつくった道 — 越後縮、近江麻布、奈良晒

展示構成としては、最上川の果たした歴史・経済的役割を導入部分としながら、特に本県に与えた文化的影響の大きさに着目し、概要の2と3の部分に重点を置きました。なかでも「青苧文化」については、新潟・滋賀・奈良の各県を調査し、それにもとづく資料を借用して本格的な展示を試みました。



青苧の帷子(かたびら) (新潟県小千谷市教育委員会所蔵)

これらの展示を通して、山形県は地理的位置、及び最上川の水運によって上方文化とのかかわりがきわめて深いこと、また、同じ東北の青森東部・岩手・宮城の各県の文化と異なり「日本海文化圏」に所属すること、などをあらためて理解していただけたと思います。

また、一方では、釈迦如来大仏や釈迦涅槃像、屏風、衣装、船や鉾模型など、展示資料が大型のものも多く、視覚的に印象付けられ理解しやすかったとの評価もいただきました。

カラー印刷の図録も大変好評で、用意したパンフレット8,000部は会期中すべてなくなるという記録的な入館者数となりました。10月6日には紀宮様にも特別展をご覧いただき、「山形の文化がよく理解できました」とのお言葉を頂戴しました。



特別展開展式 (1992. 9. 28)



特別展記念講演  
平成4年11月3日

## 日本と山形の文化(要旨)

国際日本文化研究センター 芳賀 徹 教授

### 講師プロフィール

1931年山形市生まれ、東京大学教養部教養学科(フランス分科)卒業、同大学院比較文学比較文化博士課程修了、1992年3月東京大学教養部教授を退官、現在は国際日本文化研究センター教授、専攻は比較文学、近代日本比較文化史、御尊父は歴史学者で文学博士の芳賀幸四郎先生。

現住所、〒113 東京都文京区本駒込1-17-16  
主な著書、『大君の使節』(中公新書 1968)『芸術の精神史 — 蕪村から藤島武二まで —』(共編淡交社 1976)『明治維新と日本人』(講談社学術文庫 1980)など多数、主な訳書、D.キーン『日本人の西洋発見』(中公文庫 1982)など多数。



芳賀 徹 教授

「山形の文化」とはいかなるものかを、最初に日本全体に知らしめたのは、近世近代最大の詩人の一人ともいべき松尾芭蕉である。芭蕉は元禄2年(1689)、いわゆる『おくのほそ道』の旅に出たわけであるが、この旅中詠んだ句の中で佳作といわれる句は山形、すなわち最上川に沿って出羽路の旅をするなかで詠まれた連作である。尾花沢での「涼しさを我宿にしてねまる也」「這出よかひやが下のひきの声」最上川を舟で下つての「五月雨をあつめて早し最上川」出羽三山での「涼しさやほの三日月の羽黒山」「雲の峰幾つ崩れて月の山」酒田での「暑き日を海に入れたり最上川」等々、枚挙にいとまがないが、昭和のモダニストにも擬せられる新しきがあり、芭蕉の近代詩人たるゆえんをものがたる作品群である。おそらく芭蕉は出羽路に入り、人々のくらしの風景を織りこんだ山形の自然景観を、あわせて山形の大地——山と川のつくり出す複雑な自然——が持つ古代の靈感のようなものをも詩人的直観で鋭く詠みとったのではあるまいか。出羽国の古い文化と最上川を通して入ってくる新しい文化が共生している。これこそが山形の文化であると、芭蕉はやすらぎとともに感じたのである。

芭蕉から100年後の天明8年(1788)、幕府の巡見使一行に随行して地理学者古川古松軒が山形にきている。彼はその紀行文『東遊雑記』に、例えば山形城下の項で「…郷中は(略)畳を敷きたる如き田所なり。(紅花の)美しきこと何にたとえん方なし。かようの土地は上方・中国・西国にいまだ見当らず」と山形のすぐれた風土と人々のくらしぶりを讃えている。古川は風景の中に文化を読みとった。風景は文化の中でもっとも大切なもの

のかもしれないと思う。

この古川からまた90年後の明治11年(1878)、英国婦人のイサベラ・バードが来日。東北、北海道を旅行し、その旅行記を『日本奥地紀行』にまとめている。時あたかも統一山形県が成り、初代県令三島通庸のもとで、文明開化の諸事業が展開されていた。芭蕉や古川古松軒が山形を訪ね、感得した自然景観や人々のくらし、すなわち山形の文化が大きく変貌しようとするさまを目撃したのである。彼女は三島県政のもとで急激に変貌しつつある近代山形を高く評価しつつも、そこで自然と共生しながら生きる人々とそのなりわいを、愛情をこめて「アジアのアルカディア」と讃えたのである。土木県令三島の諸事業によって山形はもはや「おくのほそ道」ではなく「ふとい道」に変わろうとしていた。

そのありさまを洋画家の眼で油絵や石版画に描いたのが高橋由一である。由一は三島県令の招きで山形を訪れ『山形市街図』『酢川にかかる常磐橋』『栗子山隧道図』等を描いた。これらの風景画において由一は、三島の要請にこたえつつ、みずからの画境を深め、この時代の画家にしかできない作品群をこの山形で描いたのである。

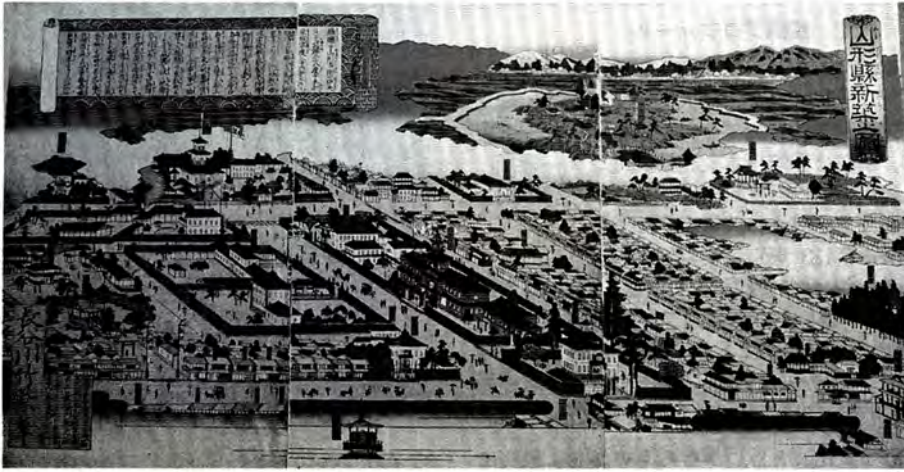
このような文明開化的なもの、近代的なものを吸収しつつ、山形の山と川の織りなす地形、その中を貫流する最上川、それに代表される山形の豊かな自然景観、その自然と共生する人々、そして新しきものと古きものが共生する山形、それらが混然と一体化したもの、すなわち山形の文化というべきものは、こののち斎藤茂吉へと繋り、茂吉の短歌という作品群に結実していったのである。

(文責：島貫育子)

## 資料紹介

## 歴史

## 山形縣新築之圖



本資料は明治14年(1881)、山形市七日町五十嵐太右エ門(現八文字屋)から出版された大版三枚続の錦絵です。統一山形県の初代県令三島通庸は山形市を県都とし、西洋建築を中心に新都市計画を断行し、また東京に直結する縦断道路、太平洋岸と内陸を結ぶ横断道路等、強権をもって大工事をを行いました。それらの業績を写真、油絵、錦絵等の形で記録しました。東京湯島の画工長谷川竹葉は、三島の招きで来形したようで、『済生館錦絵』『山形縣新築之圖』『眼鏡橋之真景』を描き、順次発行されました。当時の錦絵は、いわゆる文明開化の風潮にのって社会に急激な大変革をもたらした各種の新文物を対象としたもので、「明治絵」または「開化錦絵」といわれるものです。また輸入染料、特にアニリン染料を使った刺激的な赤や紫の色調が特色でもありました。この『山形縣新築之圖』は県庁を中心に県都の中核地域が鳥瞰図として描かれています。九間幅の主要道路のつきあたり正面に三層で時計台を持つ県庁、道路の東側に師範学校、付属小学校(南山学校)、警察本署、西側には製糸所、博物館、南村山郡役所、活版所、警察署、南にやや離れて済生館病院の三層楼、東に離れて水力機織場、千歳園、手前に旅籠町一帯が描かれました。左上に説明文があり、「県廳は(中略)、明治11年縣令三島公の新築する処なり、門外は数十歩に学校、警察、製糸場、博物館、済生館等 麓をなら各西洋模造にして三層四層の楼、碧雲に聳え、閣上の時器、蒸気の吹笛雲中に辰を報じて学事工事を勤擧し、また県廳の東数町にして千歳園を設く。地廣六万坪、四木三草及び和洋の果物菜蔬を播殖せしめて農事を導き、中央小丘を

築きて噴水に小瀑布をなし花木を移して四時の景光を添、人民偕楽の地とす。百事振興万機整理の時至れりといふべし」とあります。三島県政のもとで県都として面目を一新した山形市街の様相が絵と文から生々と伝わってきます。これらの西洋建築物は、明治12年ごろまでには完成し、明治14年9月には明治天皇の行幸を迎えたわけです。英国婦人イサベラ・バードは、明治11年来日し、東北北海道を旅行し、『日本奥地紀行』を著しましたが、山形の印象を「山形は県都で人口二万一千の繁昌している町である。大通りの奥の正面に堂々と県庁があるので、日本の都会には珍しく重量感がある。(略)政府の建物はふつう見られる混合の様式であるが、ベランダをつけたしているので見えがする。県庁、裁判所そして進歩した付属学校をもつ師範学校、それから警察署はいずれも立派な道路と町の繁栄にふさわしく調和している。」と書いています。

この『山形縣新築之圖』と、三島の御用写真師であった菊地新学の写真や洋画家の高橋由一の油絵『山形市街図』等をつき合わせてみるのも面白いでしょう。明治初期の錦絵の発行部数は300~500ほどだったと思われませんが、この『山形縣新築之圖』は現在山形市内でも数点知られているのみで、山形で発行された希少な明治錦絵資料と考えられます。(島育子)

## 〈参考文献〉

- 『山形市史・下巻近代編』
- 『山形市史・別巻2生活文化編』
- 『明治開化期の錦絵』



## 資料紹介

## 昆虫 ギフチョウとヒメギフチョウ

春の女神と言われる *Luehdorfia japonica* LEECH ギフチョウと *Luehdorfia puziloi inexpecta* SHELJUZHKO ヒメギフチョウは、アゲハチョウ科の蝶として、蝶の愛好者の間で人気のある蝶です。

山形県内には両種ともに生息していますが、ギフチョウは庄内に、ヒメギフチョウは内陸に主な生息地があり、一応すみ分けております。しかし、ギフチョウの方は一部内陸の方に生息地をのぼしてきており、そうした地域ではヒメギフチョウと混生している場所が何カ所かあります。山形県はギフチョウ、ヒメギフチョウの2種の混生地が大石田町をはじめ、数カ所ありますが、全国的にも珍しいことです。そうして、ギフチョウとヒメギフチョウの両種の間で雑交個体が生まれています。このことは、両種の関係が遺伝的にも非常に近い間柄にあることを物語っています。

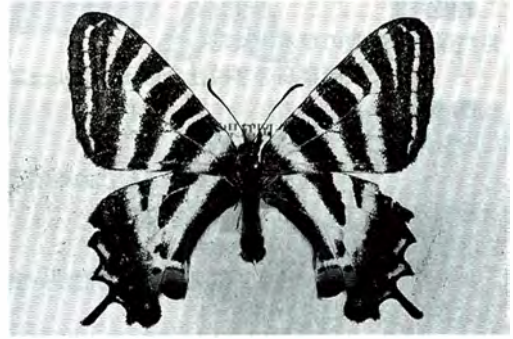
このことは、それぞれの蝶の幼虫の食草との関連からも考えられます。ギフチョウはカンアオイ科のコシノカンアオイを主たる食草としているのに対して、ヒメギフチョウの方は同じカンアオイ科のウスバサイシンを食草としています。ギフチョウの中には場所によってはウスバサイシンを食草にしている所もありますが、ヒメギフチョウの方はウスバサイシンだけのようです。

コシノカンアオイは、庄内には広く分布していますが、内陸ではほんの一部にしか分布していません。ギフチョウはコシノカンアオイの分布に沿って分布を広げて来たものと思われます。そうしてギフチョウは、さらにコシノカンアオイの分布していない地域では、ウスバサイシンも食草としています。ウスバサイシンの方は、県内全般に広く分布していますが、ヒメギフチョウの分布は内陸に限られています。

ギフチョウ、ヒメギフチョウは里山の蝶と言わ



ヒメギフチョウ



ギフチョウ

れるように、人びとが管理してきた里山に適応して分布を広げてきました。特にコナラ林を中心とした雑木林が分布の中心です。里山は、薪炭林として長い間、樹木の更新あるいは下刈りなどが行われてきました。そのことによって、春は林床が明るく、幼虫の食草になるウスバサイシンや、成虫の蜜源になるカタクリやスミレサイシンなどの植物の生育しやすい環境を作りだし、夏には日蔭になって蛹を暑さから守るという環境になります。ところが、薪炭等の需要がなくなり、里山の管理が行われなくなってきたために、里山も下草が伸び放題と荒れてきました。当然、ウスバサイシンやカタクリなどの植物は閉め出され減少していきました。ギフチョウ、ヒメギフチョウが全国的に減少してきていることの大きな原因の一つになっています。さらに里山一帯の利用は、リゾート開発のあおりを受けて、ゴルフ場や観光施設などが出来、ギフチョウなどの生息環境がなくなってきたりもしています。

現在県内では大石田町のように、積極的にギフチョウ、ヒメギフチョウを保護しようとしているところが出てきています。大石田町では、両種を町指定の天然記念物に指定し、採集した場合の罰則まで決めました。そうして、両種の活動時期には、監視員を置いて監視に当たらせています。さらに昨年は林の林縁部の間伐や下刈りなどを行った結果、今年は、産卵状況が飛躍的に増えているということです。ギフチョウ、ヒメギフチョウを保護しようとするれば、今まで里山として管理してきたような管理の仕方を続けて行かなければ保護につながらないということになります。

このようにギフチョウ、ヒメギフチョウの保護の問題は、自然保護や環境問題を考える上で大きな問題を提起しているように思えます。

(木俣 繁)

## 第18回 高等学校郷土部研究発表会審査結果

### 最優秀賞

自然保護と置賜の草木供養塔  
米沢商業高等学校社会科研究グループ

### 優秀賞

山形新幹線に対する期待度調査  
米沢商業高等学校社会科学部

長瀬城の歴史  
楯岡高等学校社会部

白鷹町大字針生地区の小字地名について  
長井工業高等学校自然愛好会

葉山の林道建設問題の研究  
南陽高等学校郷土研究部

竜馬山信仰について  
金山高等学校郷土研究クラブ

瀬見発電所について  
新庄北高等学校向町分校特別講座「社会教養」  
庄内農村における家紋の研究 ― 羽黒町の事例 ―



発表風景 (1992. 11. 5)

羽黒高等学校郷土研究同好会  
国道347号・100年の歩み  
北村山高等学校郷土部  
村山地方の隠れキリシタンについて  
山形東高等学校郷土研究部

## 第36回 日本学生科学賞山形県審査結果



表彰式 (1992. 11. 13 本館講堂)

○中学校の部

### 最優秀賞

花の色素の研究  
酒田市立第一中学校理科部

香時計は正しく時を刻むか  
山形市立第五中学校科学部

### 優秀賞

松風 (他の材質で鉄ピンを鳴らそう)  
山形市立第三中学校科学部

大豆たんぱくと卵白によるたんぱく質の  
凝固と消化  
鶴岡市立鶴岡第四中学校理科部  
○高等学校の部

### 最優秀賞

接合藻に関する細胞学的研究 (第2報)  
酒田西高等学校生物部

### 優秀賞

アンチホルミン処理によるカプトエビ卵のふ化率  
の向上について  
酒田東高等学校生物部

※ 山形五中は中央審査の結果、読売理工学院賞を受賞しました。

## ◆ 資料寄贈者紹介

### 〈地学〉

松田富士雄 (西川町) 鉱物 (メノウ) 15点  
中山 啓 (山形市) 輝緑凝灰岩 1点

——— ありがとうございました ———

## 月 表紙のことば

べにばな国体にわいた山形。国体会期中

中に来県された紀宮様が、古沢平太郎館長の案内で、本館をご観覧になりました。翌々日には、本館の結城嘉美先生と奥山武夫副館長の案内で、蔵王山観松平にも登られ、山形の自然と文化を十分に楽しまれたご様子でした。

山形県立博物館ニュース 第113号

ISSN 0918-8045

平成4年11月30日発行

山形県立博物館

〒990 山形市霞城町1番8号

TEL 0236(45)1111

山形県立博物館教育資料館

〒990 山形市緑町二丁目2番8号

FAX 0236(45)1112

TEL 0236(42)4997